

アダム・スミス 『道徳感情論』 第Ⅳ部

「役立つということが是認感情に及ぼす効果について」

山 本 陽 一 (訳)

訳者はしがき

以下は出版社と編者の承諾を得て Adam Smith (2002) *The Theory of Moral Sentiments*, Knud Haakonssen (ed.), Cambridge University Press, pp. 209-226 を翻訳したものである。

本書全体の邦訳については、米林富男訳『道徳情操論』（一九六九年、未來社）、水田洋訳『道徳感情論』（二〇〇三年、岩波書店）を参照してほしい。本稿も上の先行業績に多くを負う。村井章子・北川知子訳『道徳感情論』（二〇一四年、日経B P）も参照した。

翻訳にあたり、原文にないが、訳者が本文に付加した諸点について。①各パラグラフに改行はないが、適宜これをほどこした。②引用符号「」に相当するものは原文にないが、文意を明確にするため使用した。／や——についても同様である。③「」内の語句は訳者の挿入である。

脚注について。アラビア数字は編者の、アルファベットはスミス自身の注を示す。本書のタイトルと第IV部の目次は以下のとおり。

『道徳諸感情についての理論。あるいは、人間が、まずは隣人のふるまいと人柄について、そのあとわが身のふるまいと人柄について、自然に下す判断の基底にある諸原理を分析する一論考』

第IV部 役立つということが是認感情に及ぼす効果について。ひとつのセクションから構成

第一章 生産技術から作り出されるあらゆる品が、役立つと映ずることから授かる美しさについて。また、この種の美しさが及ぼす広範な影響について

第二章 人間の人の柄と行為が、役立つと映ずることから授かる美しさについて。また、この美しさの認識が、是認の根本原理のひとつと見なされるのはどの程度であるかについて

第IV部 役立つということが是認感情に及ぼす効果について。ひとつのセクションから構成

第一章 生産技術から作り出されるあらゆる品が、役立つと映ずることから授かる美しさについて。また、この種の美しさが及ぼす広範な影響について

1 役立つということ「効用」が、美しさの主要な源泉のひとつであることは、美の本質を構成する要素を少しでも注意深く考証した人ならば、だれしも観察してきた事実です。家の住み心地がよいことは、均斉のとれた造りと同様に、観察者を満足させ、反対に、住み心地がわるいことは、形がそろっていない一対の窓や、建ものの真ん中におさまっていないとびらと同様に、観察者の気分を大いに害します。

システムあるいは機械が、所期の目的を生み出すのに適合していることは、しかるべき適切さと美しさをシステム全体に与え、そのシステムについて考え・思索することでも心地よくします。このことは、まこと一目瞭然で、それを見過ごした人はいません。

2 また、なぜ役立つということが人を満足させるのかについて、最近、天分豊かで心地よく語る哲学者が論定しました。この哲学者は、きわめて深く思索するばかりか、きわめて風雅に表現し、難解きわまりない主題を完全無比な明快さとともに、きわめて生き生きとした弁舌の妙であつかう秀逸な才能をもっています。⁽¹⁾

彼によれば、対象が役立つときにその持ちぬしが満足するのは、対象が適確に促進する快さや便利さが絶えず彼に呈示されるからです。持ちぬしは、その対象を見るたびにこの快さを思い出し、こんなふうにして対象は、絶え間なく満足と享樂を与える源泉になります。また、それを見る観察者は、共感によつて持ちぬしの感情に入りこみ、きつと同じ心地よい観点からその対象をなめます。わたしたちは、上流身分の豪邸を訪問すると、もし自分自身がその持ちぬしで、燦然として目もくらむばかりに精妙にあつらえられた住まいを所有するならばと仮定し、そのとき味わうはずの満足感をいだかずにいられません。

対象が不便であると映ずると、持ちぬしにも観察者にも、心地わるい感じがしますが、その理由も同様に説明できます。

3 しかし、生産技術から作り出される品物が所期の目的に適合し、申し分なくしつらえられることは、しばしばその所期の目的そのものよりも高く評価される。すなわち、便利さや快さを得る手段の価値は、ひとえに、便利さや快さをどれだけ得るにかかっていると思われ、そんな手段が正確にととのえられることは、しばしば便利さや快さそのものよりも重視される。

右の点は、わたしの知るかぎり、これまでどれも注目したことのない命題です。しかし、この命題がとても多くの例に当てはまることは、人生のどんなに些細な関心事でも、どんなに重大な関心事でも、数多くの事案を検討すれば観察することができます。

(1) David Hume, *Treatise*, II, ii, 5, and *Enquiry*, V, ii.

4 ある人が自分の接客広間に入っていくと、その椅子がぜんぶ部屋の中央におかれているのを見つけるとしましょう。この人は召使に腹を立て、おそらく、椅子がこのまま乱雑におかれているのを見てより、むしろ自分の手で残らず壁ぎわを背にして椅子を配列するでしょう。この新しい情況の適切さは、ひとえに、広間の床面をゆったり空けておくのが一段と便利であることから生じます。

この便利さを得ようとして彼がみずから進んで片づけをする面倒は、その便利さがなかつたら被るはずの面倒をすべて上回ります。なぜなら、その椅子のひとつに腰かけていたら、これほど楽なこともないからであり、おそらく彼はその力仕事を終えたあとそうするでしょう。ですから、彼が求めていたのは、この便利さよりも、むしろ、それを促進する事物の編制であつたように思われます。にもかかわらず、この便利さこそ、最終的に、その編制を勧告し、それに適切さと美しさをことごとく授けるのです。

5 時計についても同様のことがいえます。それが一日二分以上おくれるなら、時計好きなら軽蔑するしろものです。彼はたぶんそれを二、三ギニーで売りはらい、五〇ギニーで二週間に一分とは狂うまい別の時計を購入します。しかし、時計の唯一の使い道は、時刻を告げ、わたしたちが所定の時間の到来を知らずに約束を破つたり、その他の不便を被つたりしないようにすることです。しかし、その人物はこの機械についてまこと口やかましいけれど、ほかの人よりも潔癖に時間を厳守するとか、それ以外の理由で正確な時刻を知ることにごだわり心配すると認められるわけは必ずしもありません。彼が時計にひかれる理由は、時刻という一片の情報を得ることよりも、むしろ、それを得るのに役立つこの機械が完べきであることです。

6 どんなに多くの人たちが、つまらないことにしか役立たない小間物にお金をつぎ込んで身の破滅をまねいているのでしょうか。こうした小道具が愛好者を満足させる理由は、そんな機械の効用「役立つこと」であるよりも、むしろ、いかにもその効用を促進するようにしつらえられた機械の性能です。彼ら愛好者のポケットには小さな生活雑貨が詰めこまれています。彼らは、より多くの生活雑貨を持ち歩くために、ほかの人の服にはない新しいポケットをこしらえます。彼らは山ほどの安びか物を携行し、その分量、また、ときにはその価値は、ふつうのユダヤ人行商の行李に劣りません。⁽²⁾ そのなかには、わずかばかり役立つものもたまにあ

りますが、壊れたりしないようにすべてがいかなるときでも大事にしまわれているかもしれず、そうだとすると、その効用全体が、あれだけの重荷をかかえてへとへとになることに値しないのはまちがいありません。

7 わたしたちのふるまいがこの原理に影響されるのは、そんなつまらない対象についてだけではありません。しばしばその原理は、人生の公私両面にわたるきわめて真面目で重要な営みの動機になります。

8 貧乏人のむすこは、身の周りを見はじめると野心に取りつかれ腹の虫が治まらなくなり、金持ちの生活条件を讚美するものです。彼は父親の陋屋が自分の住まいには狭すぎると判定し、豪邸に住んだならもつと楽だろうに、と空想します。彼は、徒歩でいくか、さもなければ馬上で疲労困ぱいに耐えなければならぬのが不満で、上役が乗りものによられて往来するのを見るにつけ、あんな乗りものひとつにも乗って仕事先をまわれば不便も減ろうというものだと想像します。彼は、自然に面倒くさくなって、身辺のこをなるべく自分でやりたくないと思ひ、たくさんの召使を従えていれば多くの面倒から解放されるだろうと判断します。彼は、自分がこうしたすべてを手に入れたあかつきには、満ち足りた気分で見舞われるので、その境遇の幸福と心穏やかさを思つて楽しく過ごし、泰然としているだろうと考えて、このはるかなる至福の観念にうつとりします。それは、彼の空想では、どこかにある上流階級の生活さながらに映り、そこに到達するため、富と上流身分の追求にいつまでも一身をささげます。

彼は、上流階級ならではの生活雑貨を手に入れようとして、最初の一年、いや、最初の一月は仕事に打ちこみますが、そこで甘受するからだの疲弊、心の不安は、一生そんな生活雑貨がなかったら被るはずの不便を上回ります。彼は勉強して、骨の折れる職業でひとかどの者になろうとします。彼は、明けても暮れても息つくわずかのひまもなく労働にいそしみ、競争相手すべてにまさる才覚を身につけようとし、つづいては、そんな才覚を人びとに知ってもらおうと努め、ぬかりなく準備し、てぐすね引いてあらゆる就職の機会をうかがいます。彼はこの目的のためなら人を選ばずきげんをとるのであつて、自分が憎む人たちにも仕え、歯牙

(2) *“I am a man, and so are you.”* がスミスの時代に何を意味したのかは定かでないが、行商人の小さなトランクだったのではないかと推測される。

にもかけない人たちにもこびへつらいます。

彼が生涯を通じて追求するのは、技巧をこらした風雅なしかるべき休息の観念ですが、彼はけつしてそこにたどりつけません。彼はその休息をえるために、いつでも手がとどく真の心穏やかさを犠牲にし、晩年ようやくその休息を手に入れても、それと引きかえに捨ててしまったつましい安心と充足感にまざる点はひとつもないことに気づくでしょう。そのとき人生はよどみきつていて、からだは、長年の激務と病気でむしばまれ、心は、数々の権利侵害と挫折——そんな目にあつたのは、敵の不正義や味方の裏切り・恩知らずのせいだと彼は想像しています——の記憶でいら立ち、掻き乱されます。やつとそのときになり、彼は、富と上流身分が些事に役立つだけの小間物にすぎず、からだを楽にしたり、心を穏やかにしたりすることに不向きであり、その点では小道具の愛好者がつ毛ぬき入れ同然であること、そしてまた、そんな小道具と同じく、富と上流身分をたずさえて往来する人の面倒は、それがもたらす福利すべての利便性を上回ることに気づきはじめます。

富や上流身分と小間物のあいだには、つぎの点を除けば、實際上のちがいはありません。それは、前者の便利な点は、後者のそれよりもいくぶんかはつきり見てとれるということです。豪邸、庭園、装身具、権門の取巻き、こうした対象の便利さは明瞭であり、だれの心にも強く響きます。これらの対象が役立つ理由は、その持ちぬしが指摘するまでもなく明らかです。わたしたちはひとりでにすぐ、それらが持ちぬしに適確にもたらす満足感に入りこみ、共感によつてそれを味わい、これとあいまつて喝采をおくります。他方、つまようじ、耳かき、つめきり、その他の同種の小道具がそそる興味は、さほどはつきりしません。それらの便利さもたぶん同様に大きいかもしれませんが、さほど心に強く響かず、わたしたちは、そんな小道具の持ちぬしの満足感にそれほどすぐに入りこみません。

ですから、こんな小道具は、富と上流身分の豪華さに比べれば、見栄をはる話題として適當でなく、一方、そんな話題になるところにこそ、富と上流身分の唯一の利点があります。目立ちたいという欲求は人間にまこと自然ですが、富と上流身分は、小道具などよりもよほど効果的にその欲求を満たします。

もしこれから無人島に独りで暮らす人がいれば、おそらく彼にとつて、幸福と享樂に絶大な寄与するのが豪邸なのか、それとも、毛ぬき入れにふつう入っているような小さな生活雑貨のコレクションなのかは、判然としない問題かもしれません。

もし彼がこれから社会のなかで人とむつみあつて暮らしてゆくならば、豪邸と小間物に雲泥の差があることはたしかです。なぜなら、この場合でも、ほかのすべての場合と同様、わたしたちは絶えず、主たる当事者の感情よりも観察者の感情にいっそう大きな関心をそそぎ、その境遇が当人自身の目にどう映るかよりも、他人の目にどう映るかということに思いをはせるからです。

しかし、観察者が富豪と権門の生活条件をなぜあんなに讚美して特別視するのかを検討するならば、その理由は、彼らが味わうと思われている上等なくつろぎや楽しみでなく、むしろ、それを促進するための・技巧をこらした風雅な無数の仕かけであることがわかるでしょう。観察者は、富豪や権門がほかの人びとよりも実際に幸福であるとは想像さえしません。観察者が想像するのは、富豪や権門が幸福の手段をほかの人よりもたくさん所有しているということです。

ところで、観察者がいさぐち賞賛の念は、幸福のそんな手段が所期の目的に向けて、精妙に目もくらむばかりにととのえられていることから湧いてきます。しかし、重い病気で氣力がなえ、退屈な老年期をむかえると、上流身分ならではの無益で空虚な殊遇を味わう楽しみは消えうせます。こんな境遇に至った人にとって、かつて彼を魅了して汗だくの稼業につかせたそんな楽しみは、もはやそれを勧告する力もちません。彼は、心のなかで野心をのろい、青年期の安逸と無為をやり過ぎたことを悔いても後の祭、楽しみは逃げ去って永遠にもどらず、手にしてみれば本当の満足など何ひとつ与えないものと引きかえに、愚かしく犠牲にしてしまいました。陰うつになったり重病をわずらったりしてわが身の境遇を注意深く観察し、自分の幸福に本当に欠けていることいやおうなく思いをはせる人の目に、権門たることはこんなにもみじめな様相で映ります。

こんな境遇のとき、権力と富は、ありのままのすがたで映ります。それは、わずかばかりのつまらない生活雑貨を生産して肉体に供するために仕組まれた巨大で手間のかかる機械であり、それを支えるばねのようすは精巧で繊細きわまりなく、これを狂いなく動かせるには念には念を入れて注意しなければならず、しかもどんなに手入れをしても、いまにも木っ端みじんにはじけて不運なその所有者を廢材の下敷きにする恐れは片時も去りません。

権力と富は、巨大な構造物であり、それを建てるには一生働かねばならず、そこに暮らす人の頭上にくずれ落ちる恐れは片時も去りません。それが建っているあいだ、わりあい小さな不便から住人を救えても、季節特有のもっと酷烈な悪天候から守ることはできません。それらは、夏の雨にわか雨を防ぎますが、冬の嵐には無力であり、住人を心配・恐怖・悲しみ、また、病氣・危機・死

にさらしたままであり、それはこの構造物ができて相変わらずつねにひどく、ときにはそれができる以前よりもひどいのです。

9 しかしです。この悲観的な哲学は、気分がすぐれず元気がないときにはだれにでも親しまれ、人間が欲しがるあの偉大な対象をこうしてことごとく軽んじます。それなのに、わたしたちは、わりあい健康で気分がよいときには、きつとそれらをもつと心地よい観点からながめます。

想像力は、つらくて悲しいとき、わが身ひとりの身柄のうちに閉じこめられ・押しこめられるように思われますが、くつろいで順境にいるときには、周囲のあらゆるものに広がります。そのときわたしたちは、権門の豪邸とその家計にゆきわたる切り盛りの美しさに心を奪われ、彼らのくつろぎを促進し、欠乏を予防し、願いごとをかなえ、きわめて軽薄な欲望を興じ楽しませるために、万事がうまくかみ合うありさまを賞賛します。

こうしたすべてのものが与える実際の満足は、それを促進するためにしつらえられた編制の美しさから切り離してそれ自体として考察すれば、つねにきわめて軽蔑すべきつまらないことと映るでしょう。しかし、わたしたちが実際の満足をこんな抽象的で哲学的な視点からながめることはめつたにありません。

わたしたちは、自然に任せていると、想像のなかでこの実際の満足を「秩序」と混同し、あるいは、「システムの規則正しく調和のとれた運動」、「満足を生み出す装置」つまり「家計」と混同します。富と上流身分から生ずる楽しみは、この複雑な見方から考察すると、壮大で美しく気高いものとして想像力に強く響き、わたしたちはそれを手に入れようとややもすると汗水たらし、一喜一憂するくらいが強くあり、そんなすべての苦勞はじゅうぶん割に合うと想像します。

10 ところで、こんなふうにして自然がわたしたちに付け入り欺くのはよいことです。この欺瞞があればこそ、人類の勤勞意欲は目覚めて、絶え間ない活動をつづけます。人類はこの欺瞞によつて衝き動かされ、まず、大地を開墾し、家屋を建設し、都市と政治共同体ポリティカル・コミュニティを設立し、つぎに、人間の生活に気高さと彩りをそえるすべての学識と学芸を開拓・改良しました。この欺瞞によつて、地表全体はすっかり変貌し、自然の原生林は、心地よく肥沃な平地に転換し、また、人跡未踏の不毛な大海は、生活資源の新たな

宝庫になるとともに、陸上のさまざまな国民のもとに通じる重要な幹線航路になりました。大地は、人類のこうした労働により、いやおうなくその元来の地味をますます肥やして、より多くの人口を扶養しなければならなくなりました。

尊大で非情な地主が、自分の広大な耕地をながめて、同類の窮乏をならかえりみず、そこに育つ穀物をぜんぶ自分ひとりで消費するのだと想像してみても無駄なことです。素朴で庶民的なことわざに「目は腹より大きい」といいますが、その正しさを余さず証拠立てる例として、この地主にまさるものはありません。地主のおなかの容量は、彼の欲望の巨大さに比例せず、身分のもっとも卑しい小作人が食べる量と同じくらいしか受けつけないでしょう。

地主は食べきれない残余の穀物をいやおうなく分配しなければなりません。その分配を受ける人は、地主が利用する一人分のわずかな分量を丹精こめて支たくする人びとであり、この少量の穀物の消費先である豪邸に調度品をそろえる人びとであり、権門の家計で使用されるさまざまな安びか物や小間物をもれなくあつらえて整然と管理する人びとです。以上の人たちはみんな、こんなふう⁴に地主のぜいたくと酔狂から生活に必要な自分の分け前を引き出すのであって、地主の情け深さや正義の美德からそれを期待しても無駄だったでしょう。

その土地の生産量は、それが養うことのできる人口とほぼ等しい数の住民をいつの時代にも養います。金持ちは、穀物の山からせいぜい希少な口あたりのよい部分を選びとるにすぎません。金持ちは、貧者と同じくらい少量しか消費せず、根っから身勝手な強欲なのに、開墾地すべての生産量を貧者と分け合います。もとより、彼らの心づもりは、わが身ひとりの便宜を図ることだけであり、また、彼らが数千人の雇用者すべての各種労働から企図する目的は、わが身ひとりの空しく飽くなき欲望を満たすことだけですけれども、金持ちが見えざる手⁴に導かれておこなう生活必需品の分配は、かりに大地がその全住人のあいだで平等な持ち分に分割されていたとすればおこなわれたはずの分配とほぼ同じです。こうして彼らは、共に暮らす人びとの利益を、意図もせず知り

(3) このパラグラフの諸々の主題は、マンデヴィルとルソーに比べて考え抜かれたものであり (cf. 'Letter to the Editors of *Edinburgh Review*' in *ERS*)、文化とそれを支える経済学的裏づけについてスミスがもっていた全体的な見通しの中核である。たゞスミス『*WN* I. xi. c. 7; *LJ* (A) iii. 135ff を見よ。スミスの歴史の俯瞰については、*WN* III を見よ。

(4) スミスはこの有名な語句をほかの二か所において別々の意味で使っている。『*WN* IV. ii. 9, and 'History of Astronomy', III. 2 (in *ERS*)

もしないで増やし、種族を増殖させる手段をまかいます。

摂理は、わずかな首長たちに大地を分割したとき、分割当初に除外されていたように思われる人びとを忘却したわけでも見捨てたわけでもありませんでした。この人たちもまた、大地が生産するすべてのなかから自分の分け前を享受します。人生の真の幸福を成り立たせる要件について、この人たちは、彼らよりもずっと上層にいると思われてきた人たちにどこも劣りません。からだの安楽と心の平和については、暮らし向きがちがっていても、皆はほとんど同等であり、街道の脇でひなたぼっこをする物乞いも、王たちが争い求めている安心をもっています。⁽⁵⁾

11 以上と同じ原理、つまり、システムを愛玩する感情、秩序の美しさや生産技術と仕かけの美しさにそそぐ関心は、公共の繁栄を促進する傾向がある諸制度を勧告するさい、しばしば有効です。

愛国者が国内行政のどこかの部門を改善しようと尽力するとき、彼のふるまいの動機は、その利用者の幸福によせる純粹な共感とはかぎりません。公共に尽くす精神の持ちぬしが、街道の改修事業を奨励するとき、その動機は、通常、運送人や荷車の御者によせる同類感情ではありません。立法院が、賞与金その他の奨励策を制定して、亜麻布や羊毛の手工業生産を高めようとするとき、そのふるまいの動機は、安物を着る人や上物を着る人によせる純粹な共感ではほとんどなく、まして、製造業者や貿易商人によせる純粹な共感ではありません。

国内行政の完成、商工業の拡大は、気高く壮麗な対象です。これらについて思索することはわたしたちの楽しみであり、これらを発展させる傾向があるどんなことも、わたしたちの興味をひきます。国内行政の完成、商工業の拡大は、偉大な統治システムの構成要素であり、政治機構の歯車は、このふたつの要素によっていつそう調和を保ち、なめらかに動くように思われます。わたしたちは、まこと美しく壮大なシステムの完成をみることに喜びを感じる一方、システムの規則正しい運動を少しでもさげすんだり鈍らせたりしかねない障害を取り除くまで不安です。

しかし、すべての統治体制は、そのもつて暮らす人びとの幸福を促進する傾向の大小に即してのみ、その価値が測られます。人びとの幸福だけが唯一、統治体制の使途であり、目的です。しかし、わたしたちは、理論体系を重んじるしかるべき精神、生産技

術と仕かけを愛玩するしかるべき情念のせいで、目的よりも手段に高い価値を認めるように思われることがあります。つまり、同類被造者の幸福を促進したいという熱情の源泉は、同類被造者が味わう苦しみや欲びについて即座にいだく感覚・心情であるよりも、むしろ、しかるべき美しい・整然としたシステムを完成し、改良しようという見解なので⁶⁾。

公共に尽くす精神はきわめて強いのに、それ以外の面で情け深い心情にさほど敏感でないたちの人は昔からいますし、逆に、きわめて情け深くありませんが、公共に尽くす精神がまったくなくとも思われる人もいます。だれしも周囲の知人のなかに、両方のタイプの实例を見つけられます。モスクワ大公国のあの名高い立法者ほど情け深さを欠き、半面では、公共に尽くす精神にあふれた人物がかつていたでしょうか。逆に、イギリスのジェイムズ一世は、社交的で根っからの善人でしたが、自国の栄光にも利益にもめったに情熱をもたなかったように思われます。

野心がほとんどないと思われる人の勤労意欲を目覚めさせたいと思えば、そんな人に富豪や権門の幸福を描いてみせても無駄な場合が多いでしょう。富豪や権門はだいたい日ざしと雨から保護され、ほとんどひもじくも寒くもなく、疲労やいかなる欠乏にもめったにさらされない——こんなことを彼に説いても徒勞でしょう。この種のことについてどんなにことば巧みに口説いても、彼にはほとんど効き目がないでしょう。彼を説得したいとお望みなら、富豪や権門の豪邸のさまざまな部屋が便利にしつらえられたようすを描いてみせなければならず、また、彼らの装身具には彼らならではの適切さがあることを説明し、彼らにかしづくお供のすべてについて人数、序列、さまざまな役目を指摘しなければなりません。もし彼に強い印象を与えることが何かあれば説得で

(5) Cf. Cicero, *Tusculan Disputations*, V. xxxii. 92; Epictetus, *Discourses*, III. xxii. 45-50.

(6) 「システムの精神」については、VI.ii.2-15-18を見よ。機械の類比については、VII.iii.12を見よ。システムの概念は、科学と哲学に関するスミスの著書の中核⁷⁾である。たとへば、VII.iv (the system of jurisprudence); *WN* V. i. E.24ff. (natural versus moral philosophy); 'History of Astronomy', IV. 19; *History of Ancient Physics*, 9を見よ⁸⁾。

(7) ビョートル一世（大帝）（一六七二—一七二五年）、ロシアの初代ツァー。ロシアは、一八世紀には一般にモスクワ大公国として知られていた。*WN* V. i. a.40におけるスミスの評価を参照。

(8) ジェイムズ（一五六六—一六二五年）は、スコットランドではジェイムズ六世（一五六七年）、イングランドではジェイムズ一世（一六〇三年）。

きるでしょう。しかし所詮、こうしたことはすべて、富豪や権門を日ざしと雨から守り、彼らを飢えと寒さから、また、欠乏と疲労から救う傾向しかありません。

同様に、自国の利益に無頓着であると思われる人の胸に公共に尽くす美德を植えつけたいとお思いなら、善政を敷く国家の臣民がどんな上等の福利を享受するかを彼に説いても無駄な場合が多いでしょう。その臣民の住宅事情、衣料事情、食糧事情はいずれも良好であると説いても、こんな理由づけはふつう大して強い印象を残さないでしょう。

こんな相手をもつとうまく説得するには、衣食住の福利をとどける国内行政の立派なシステムを描いてみせたり、システムの各部門が連携し依存する関係のありようや、各部門が順次に他を下請けする関係にあり、総体としてその社会の幸福に奉仕することを説明したり、また、どうすればこのシステムをその人自身の国に導入でき、なにかその国でシステムの成立を目下邪魔しており、どうすればその障害は取り除かれ、統治機構の各種菌車がすべて互いに摩擦を生じず、相互の運動を停滞させず、いつそう調和を保つてなめらかに動くようになるかを示したりするのがよいでしょう。この種の論議を聞けば、ほとんどの人は胸が高鳴り、公共に尽くす精神を少しくらいは感じます。人は、すくなくともそれを聞いた当座は、そんな障害を取り除きたい、そんなに美しく、まこと整然とした機構を作動させたいという欲求を多少は感じるでしょう。

政治学の研究にもまして、公共に尽くす精神を促進する傾向が強いものはありません。その課題は、世俗の各種統治システム、その有利な点と不利な点であり、わが祖国の体制、わが国がおかれた状況、つまり、諸外国との関係で有する權益、わが国の商業、防衛であり、また、わが国がかかえる不利な点ならびに直面しうる危機、その不利な点を取り除いたり、その危機を注意深く予防したりする方法です。

このようなわけで、政治学の論説は、正当で理にかなない、かつ実践的であるならば、あらゆる理論的思索の著作でもっとも有益です。こうした著作は、どんなに根拠薄弱で出来が悪くても、まったく役に立たないということはありません。すくなくとも、それは、公共に尽くしたいという諸情念を高ぶらせる効果をもち、共に暮らす人びとの幸福を促進する手段を探求すべく人間を一念発起させます。

第二章 人間の人物と行為が、役立つと映することから授かる美しさについて。また、この美しさの認識が、是認の根本原理のひとつと見なされるのはどの程度であるかについて

1 人間が育む人物は、技術が作る仕かけや、世俗政府が立てる制度と同じく、個人およびその人と共に暮らす人びとの幸福を促進するのにあつらえ向きの場合もあれば、それを邪魔するのにあつらえ向きの場合もあります。

目先が利き注意深い人物、衡平をおもんばかる人物、活動的で・決断力があり・冷静な人物は、当人自身とその人につながるすべての人に順境と満足を約束します。逆に、あわてもの、いばる人、なまけもので・女々しく・酒色にふける人物は、当人には身の破滅を、この人と少しでも関係があるすべての人には非運を予感させます。

第一の性向には、すくなくとも、きわめて心地よい目的を促進するために発明された史上もつとも完全な機械がもちうる美しさのすべてがあります。第二の性向には、この上もなく不細工でぎこちない仕かけの醜さがすべてあります。

政府の立てた制度がどんなに強力に世人の幸福を促進する傾向をもつとしても、知恵と美徳が普及した状態には及ぶべくもありません。あらゆる統治は、知恵と美徳の不足に対処する不完全な救済にすぎません。ですから、世俗政府が役立ち、そのせいでどんなに美しかろうと、それをはるかに上回る美しさが知恵と美徳にはあるにちがいません。逆に、国内行政がどんなに破滅的・破壊的であろうと、人間の悪徳にはかきません。悪しき統治がもたらすゆゆしい結果は、ひとえに、人間の邪悪さがもたらす害悪に対して政府の予防策が周到でないことから生じるにすぎません。

2 このような人物の美しさと醜さは、人物が有益または不便であることから生ずると映り、人間の行為・ふるまいを抽象的・哲學的な視点から考察する人びとの心に、独特なしかたで強く響く傾向があります。哲学者は、情け深さが是認され、残酷さが糾弾される理由の検討にとりかかるとき、特定の残酷行為や情け深い行為の具体像をさほど明瞭・克明に思い描くとはかきらず、ふつうは、そんな資質をしめす一般名称が呈示するあいまい・あやふやな観念で事足りるとします。

しかし、具体的事件を審理するのではありません、行為の適切さと不適切さ、行為の功勞と罪責は、さほどはつきりせず、識別しに

くくなります。わたしたちは、具体的な実例を与えられるときにはじめて、自分の心の動きと行為者の心の動きのあいだに、協和や齟齬をはっきりと認識し、また、そこに協和があれば何やら和気あいあいとした感謝の念が湧き、そこに齟齬があれば何やら同情に満ちた憤りが湧いて行為者にそそがれるのを感じます。

抽象的・一般的なしかたで美德と悪徳を考察すると、それらが感謝の念や憤りを掻きたてるさいに介在する資質は、おおかた視界から消えるように思われ、そんな感情そのものも一段とあいまいになり、識別しにくくなります。逆に、美德がもたらす幸福な結果や、悪徳がもたらすゆゆしい結果は、このような考察において視界にせり上がり、そんな結果以外のあらゆる資質から、いかなれば、抜きん出て異彩を放つように思われます。

3 なぜ役立つということが人を満足させるのか。それを最初に説明してみた天分豊かで心地よく語るあの著者その人にして、この「抽象的・哲学的な」もの見方に強く心を打たれ、美德を是認する感情すべてを、役立つと映ることから生ずるこの種の美しさの認識に還元してしまいました。彼の観察によると、有徳として是認される心の資質は、本人または他人にとって有益で心地よい資質のほかになく、背徳として否認される心の資質は、その反対の傾向をもつ資質のほかにはありません。

ところで、たしかに、自然は、本人およびその人と共に暮らす人びとの便宜にかなうように、わたしたちの是認と否認の感情をじつにうまい具合に調節したように思われ、きわめて厳密に検証してみれば、先の著者の説明は一貫して通用することがわかるだろうとわたしは思います。

しかし、それでもわたしは、「是認と否認の感情が最初に湧いてくる源泉も、主として湧いてくる源泉も、このように役立つと有害であるという見方ではない。」ということを肯定します。たしかに、是認と否認の感情は、このように役立つと有害であることから生ずる美醜の認識によつて高鳴り、生き生きとします。しかし、それでも、「是認と否認の感情は、この美醜の認識とは、根源的かつ本質的に異なる」というのがわたしの命題です [cf. II. ii. 3. 6-9]。

4 この命題の第一の論拠。美德を是認する感情は、便利で精巧な建物を是認するときに介在する感情と同じ種類ではありえず、

人に讃辞をおくる理由は、整理ダンスを讚美する理由と同じではありえないと思われ(10)ます。

5 その第二の論拠。検証してみればわかりますが、心理的習性が有益であることは、それを是認する最初の根拠ではほとんどありません。また、是認感情は、「役立つ」という認識とはかなり違う「適切さ」の感覚をつねに要素として含みます。このことは、有徳として是認される資質のすべてについて——この学問体系によれば、本人に有益であることから当初に評価される資質、および、他人に有益であることから高く評価される資質について——観察することができます。

6 本人にきわめて有益な資質の第一は、卓越した理性と知性です。わたしたちはこの能力を使い、自分のあらゆる行為から先々生じる結果を見分け、そこからいかにも生まれそうな福利や損害を予見します。その第二は、自制心です。わたしたちはこの能力を使い、いつか将来もつと大きな快樂を得たり、もつと大きな苦痛を避けたりするために、現在の快樂をさしひかえ、あるいは、現在の苦痛を耐え忍びます。これらふたつの資質が合一するところに、予見注意力「慎慮」が美徳として成立します。この美徳は、すべての美徳のうちで本人にいちばん有益です [cf. VI. i. 2]。

7 上の第一の資質、卓越した理性と知性は、先行箇所(11)で観察したように、それが当初に是認されるのは、正当にして正道かつ精密だからであって、単に有益または有利だからではありません。

人間の理性が最大限に發揮され、絶賛される活躍が繰り広げられたのは、難解な学識、とりわけ高等数学の分野です。しかし、こうした学識が当人や公衆に役立つことはあまり明瞭でなく、それが役立つことを立証するには、つねにとてもわかりやすいとは言いかねる議論が必要です。ですから、そんな学識が最初に勧告されて公衆の賞賛をえたのは、役立つからではありませんでした。

(9) Hume, *Treatise*, III. iii. 1; *Enquiry*, IX. i. 後出 VII. ii. 3. 21, VII. iii. 3. 17 を参照。

(10) 一かゝる「反対論」に対して機先を制して云々。 *Treatise*, III. iii. 5, *Enquiry*, V. i. 1, first note を見よ。

(11) I. i. 4.

そんな高尚な発見の数々にみずからは審美眼をもたない連中が、それは役に立たず価値がないと言いつのり、その叱責に返答する必要があるまで、役立つという資質はわずかに主張されたにすぎません。⁽¹²⁾

一六

8 自制心についても同様です。それは、現在の欲望を押しこらして別の機会にそれをいつそう十全にかなえる力ですが、この美德は、「役立つ」という観点だけでなく、「適切である」という観点からも等しく是認されます。

わたしたちが自制心にしたがい行動するとき、そのふるまいに影響をおよぼす感情は、これを見る観察者の感情とびつたり波長が合うように思われます。観察者は、わたしたちが現在いまだ欲望の誘惑を感じません。彼にとつて、わたしたちが一週先とか一年先に味わう快樂は、いまずく味わう快樂とまったく同じように興味をひきます。ですから、わたしたちが現在のために未来を犠牲にすれば、そのふるまいは、観察者の目に、愚の骨頂で野方図きわまりないと映り、彼は、わたしたちのふるまいを支配する主義に入りこめません。逆に、わたしたちが、将来のいつそう大きな快樂を確実にえるために、現在の快樂をさしひかえるとき、つまり、まるで、遠くの対象と五官に即座に印象を刻む対象が、同じ強さでわたしたちの関心をひくように行動するとき、その心の動きは、観察者自身の心の動きとびつたり共振共鳴します。ですから、観察者は、わたしたちの態度をきつと是認し、さらに、こうした自制心の持ちぬしがどんなに少ないかを経験上知っているので、わたしたちのふるまいをみる彼の目には、強い驚嘆と賞賛の念がこもります。

こういうわけで、質素に暮らし、労働にいそしみ、仕事に打ちこむ日々が、たとえ財貨の獲得だけを目的にして営まれるとしても、それに辛抱がよく耐えるすがたを見れば、だれの胸にも自然に深大な敬意が湧きあがります。こんなふうに行動する人、つまり、遠い先でも大きな福利を獲得するためなら、現在の快樂をいっさい断念するばかりか、心身ともにどんな重い労働を課されても耐える人は、決然として動じない堅固な意思があり、きつと是認を勝ちえます。彼のふるまいを規律すると映る利益と幸福についての見解は、同じくそれについてわたしたちが自然に思い描く観念とびつたり符合します。彼の感情とわたしたちの胸の感情の共振共鳴は、きわめて完全であり、また同時に、経験上、人間の自然本性は弱いのがふつうであることからすれば、当然には期待すべくもなかった共振共鳴です。ですから、わたしたちは、彼のふるまいを是認するばかりか、多少とも賞賛し、つづいて、相当

大きな喝采に値すると思えます。

この相応の報いとして得られる是認と敬意の意識があれば、それだけで、こんな基調でふるまう行為者は、くじけないでいられます。十年先に味わう快樂は、きょう味わえる快樂に比べてまことわずかな関心をひくだけであり、また、十年先の快樂が掻きたてる情念は、きょうの快樂が起こしがちな激しい情動に比べるとまことに弱いのが自然です。ですから、十年先の快樂がきょうの快樂とつりあうには、適切さの感覚——「十年先の快樂を待てば、万人の敬意と是認に値し、きょうの快樂を味わえば、万人の軽蔑と嘲笑の適切な対象になる」という意識——によって支えられることがぜひ必要です。

9 情け深さ、正義、高潔無私、公共に尽くす精神、これらは、他人にとつてきわめて有益な資質です。情け深さと正義にやどる適切さの本質が何かという問題については前述しました。⁽¹³⁾そこで示されたのは、これらの資質にそそがれる敬意と是認は、行為者の心の動きと観察者の心の動きの協和によってなんと大きく左右されるのだろうかということでした。

10 高潔無私と公共に尽くす精神にやどる適切さの根底には、正義にやどる適切さの場合と同じ原理があります [cf. II.1.5.1-6]。高潔無私は、情け深さとはちがいます。これらふたつの資質は、初見では、密接に関連しているように思われますが、かならずしも同一人物にそなわるものとはかぎりません。情け深さは女性の美德であり、高潔無私は男性の美德です。婦人は、ふつうわたし

(12) スミスが言及している議論は、ジョージ・パークリイが *The Analyst* (1734) で数学に対し、とりわけ、ニュートンの流率法に対しておこなった批判の類であろう。また、そこでの返答とは、とりわけ、スコットランド人の数学者 Colin Macaunn (1698-1746) がその *Treatise of Fluxions* (1742) でおこなったものである。

(13) I.1.3.1. 「その冒頭文。「主たる当事者が当初にいだく情念と、それを見た観察者が共感によっていだく情動とが、完全な協和をなす場合、きつと当事者の情念は、観察者の目に正当・適切なもの、つまり、その対象に似つかわしいものとして映ります。逆に、観察者が当事者の状況を心に親しく思い描いて、当事者の情念と自分の心情は波長があわなない認定するとき、きつと当事者の情念は、観察者の目に不正・不適切なもの、つまり、その情念を掻きたてる原因に似つかわしくないものとして映ります。」

たち男性よりもずっとたくさん的心やさしさをもちますが、大いに高潔無私であることはまれです。「女性が高額の寄付をする」とはめつたにない」とはローマ法の知見^{(a)14}です。

情け深さの本質は、観察者が主たる当事者の感情によせる繊細優美な同類感情だけであつて、それをいだけば、当事者の苦しみを案じて悲しんだり、当事者の被つた権利侵害を憤つたり、当事者の好運に大喜びしたりします。どんなに情け深い行為でも、それをするのに克己心や自制心は要らず、適切さの感覚を大いに発揮する必要ありません。情け深い行為の本質は、この繊細優美な共感感情がおのずからわたしたちを触発してさせようとする行為の実行だけです。

しかし、高潔無私の本質はそうではありません。わたしたちがかりそめにも高潔無私であるというのなら、なんらかの点で自分よりもほかのだれかを優先したり、自分の重大な利益を、友人や上司の同等な利益の犠牲にしなくてはなりません。ある公職を重要な目標として野心を燃やしていた男が、自分より別人のほうが、献身ぶりからみてその職にふさわしい資格があると想像し、就任の権利主張を取り上げるとしましょう。また、自分の生命よりも友人の生命を重要と判断した男が、命がけでそれを守るとしましょう。この男たちは、いずれも情け深さから行動していません。つまり、わが身にかかわることよりその相手にかかわることを繊細優美に感じるからそうするわけではありません。

この男たちは、いずれも彼我の相反する利益を考えると、それがわが目に自然に映る視点でなく、他人の目に映る視点に立っています。あらゆる局外者の目には、この相手方の人物が成功したり助かったりするほうが、あの男たち自身がそうなるよりも興味をひいて当然だとしても、あの男たち自身にとつてそんなはずはありません。それゆえ、彼らは、この相手方の利益のために自分の利益を犠牲にするとき、観察者の感情と折り合い、つづいて、豪胆をふりしほつて、およそ第三者の心に自然に浮かぶにちがいないと彼らに感じられるものが見方にしがたい行動します。

上官の生命を守るためにみずからの生命をなげうつ兵士であつても、上官の死が偶然に起こり、自身になんの落ち度もなければ、おそらくその死によつてほんの少ししか心を動かされません。しかも、とても小さな災厄がわが身にふりかかつたら、そのほうがよほど生々しい悲しみを掻きたてるでしょう。しかし、この兵士が、喝采に値するべく行動しよう、つまり、公平な観察者をわがふるまいの主義に入りこませるべく行動しようとするとき、兵士は、「自分以外のすべての人からみると、わが命は上官のそ

れに比べて取るに足りないものだ。「わが命を上官の命の犠牲にすることは、公平な局外者ならだれもがいただく自然な理解に照らせば、なかなか適切で心地よい行動だ」と感じます。

11 以上のことは、公共に尽くす精神がもっと強く発揮される場合にも当てはまります。若い司令官が命がけでどこかの小さな領地を獲得して主権者の領土を広げる場合、その理由は、新しい領地の獲得が、彼自身にとって、自分の生命を保存するより望ましい目標だからではありません。彼にとっては、自分の生命のほうが、彼の献身する国家のために王国をまるごとひとつ征服するよりも限りなく大きな価値をもっています。

しかし、彼は、これら二つの対象を相互に比較するとき、それがわが目に自然に映る視点からでなく、軍務で仕える国民の目に映る視点からながめます。国民にとって、戦争で勝つことはきわめて重要な意義をもちますが、一個人の生命はほとんど意義をもちません。彼が国民の境遇にわが身をおくとき、「もし自分の血を流してこんなに価値ある目的を推進できるなら、いくら自分の血を流すとも惜しくはない」と即座に感じます。

以上のように、義務と適切さの感覚を動機にして、もっとも強い自然の衝動を封じることこそ、彼のふるまいを英雄的にする要件です。民間にいれば、一ギニーを失うほうがミノルカ島の領有権を失うよりも深刻な悩みのたねであるが、この要塞を守ることが自分の権限に属していたら、自分の落ち度でみすみすそれを敵の手に渡してしまうより、むしろ何度でも自分の命を犠牲にした⁽¹⁵⁾ だろう——そう思う正直なイングランド人はたくさんいます。

(v) *Raro mulieres donare solent.*

(14) 「婦人はめったに寄付をしな^う。」この格言はローマ法の複数の注釈書にあり、S. Dooyz, *Juris Civilis Summa seu Index* (1610)——近時の版（一七四二年）がある——の一般索引（mulierの項）に見出される。

(15) 七年戦争の初期、一七五六年五月のこと、John Bmg (1704-57) 提督は、イングランド領のミノルカ島からフランス海軍が脱出するのを許し、フランス軍に占領されていた当地の守備隊を救出することに失敗した。ビングは軍法会議にかけられ、処刑された。

初代ブルートゥスは、息子たちが共謀してローマのいや増す自由に反対したため、率先して彼らを死刑に追いやりました。¹⁶そのとき、彼は、わが胸だけに諮っていたら、もつと強く映じたはずの心の動き「肉親の情」を、もつと弱く映じたはずの心の動き「祖国愛」の犠牲にしました。ブルートゥスがわが子の死を前にした心情は、厳然たる見せしめがなければおそらくローマが被っていた苦しみすべてを前にするよりも、本来ならばずっと強かったにちがいありません。しかし、彼は、父親の目ではなく、ローマ市民の目でわが子をながめました。彼は、この後者の人柄の感情に隔々まで入りこみ、自分と子をつないでいるきずなをかえりみませんでした。ローマ市民の目には、ブルートゥスの息子といえども、ローマのどんなに小さな利益と較量しても軽蔑に値すると思われたのです。

これらの事例や同種のあらゆるほかの事例において、わたしたちがいさぐさ賞賛の根底にあるのは、そんな行為が「役立つ」ということよりも、むしろ、行為の「適切さ」が予想を超え、それゆえに偉大で気高く高貴であるということです。この役立つということは、わたしたちの視野に入ってくると、たしかに、そんな行為に新たな美しさを授け、そのせいで、ますます強くそんな行為を是認感情に対して勧告します。しかし、この美しさは、もっぱら内省と理論的思索をする人たちによって認識されるのであり、大衆の自然な感情に対してそんな行為を最初に勧告する資質ではけっしてありません。

12 以下の点は留意しておくのがよいでしょう。是認感情は、役立つことに由来するこの美しさの認識から湧きあがるかぎり、他人の感情とはいかなる照合もされていない、というのがそれです。

したがって、人が社会とまったく心を通わせないで大人になれるとしても、それにもかかわらず、彼ひとりとする行為は、みずからの幸福や苦境をまねく傾向があるせいで、当人に心地よかったり心地わるかったりするかもしれません。彼は、目先が利いて注意深く、節制に努め、善良にふるまう態度に、この種の美しさを認識する一方、それとは逆の態度に、醜さを認識するかもしれません。言いかえると、彼は、前者の態度をとる場合、自分ひとりの気性や人柄をながめて、精巧な機械を考察するときに味わうような満足を感じる一方、逆の態度をとる場合、とても不細工でどこちない仕かけをみるときに味わうような嫌気と不満足を感じるかもしれません。

しかし、こんな美醜の認識は、純粹に興味の問題です。そこには、適切に興味と呼ばれることからの根底にある精妙な認識の幽玄繊細さがすべてそろっています。ですから、おそらくそんな「洗練された」認識は、この孤独でみじめな生活条件にいる人からは大して注目されないでしょう。

たとえそんな認識が彼の心に浮かぶとしても、彼が社会と交渉をもつ前にそれが及ぼす効果は、社会と交渉をもつた後に及ぼす効果とけっして同じではないでしょう。「社会と交渉をもつ前の」彼は、自分の気性や人柄の醜さを思い浮かべて内心の恥辱に打ちのめされたりせず、あるいは、その美しさを意識して人知れず勝利に酔い、浮かれた気分になったりしないでしょうし、また、後者の場合にねぎらに値すると思ひ込んで得意になったりせず、前者の場合に処罰に値するのではないかと怪しんでわなないたりしないでしょう。

こんな感情はすべて、「自分のほかにだれか存在する」という観念 (the idea of some other being) を前提にしています。その存在する他者とは、こんな感情を感じる人を判定する「自然の裁判官」です。そして、人は、自分のふるまいを判定するこの仲裁人の判決に共感するという方法によらなければ、自分に喝采をおくる勝利の喜びも、自分に有罪を宣告する恥ずかしさも、心にいだくことはできません。

(やまもと・よういち 法学部教授)

(16) 伝承によれば、Lucius Junius Brutus がローマ共和国を建てたのは、紀元前五〇九年であり、このとき彼は専制君主 Tarquinius Superbus を追放し、初代執政官に選ばれた。彼は、ローマ人民に二度とローマに在君を許さないと誓わせたが、彼自身の息子たちが誓いを破り、共謀してタルクイン一族の復古を企てた。そこで、ブルートゥスは彼らに死刑の有罪判決を下し、その処刑を監督したとされる。これは、イギリス「空位期」で、ローマ共和政の再解釈を通じて市民的自由を説く一派のおなじみの話であった。